

# 私は認知症ですか

小規模多機能型居宅介護事業所「ユアハウス弥生」は、認知症の人がよりよく生きるための介護に力を入れている。日常生活に溶け込んだ取り組みを、介護スタッフ主任でケアマネジャーの金山峰之さん(三三)につづつてもらった。



# 人格尊重 生まれる安心

「私は認知症ですか？」と、ある晩、山本さん(仮名・八十年代女性)がユアハウスの電話をしてきました。夕方、自宅に帰ってテレビを見ていると、出演者が「認知症の人は人の名前を忘れたり、道に迷ったりすることがある」と言っている。「自分のことじゃないか」と驚いたそうです。「認知症ってどうなるの？ 認知症って治るの？」私は認知症じゃないよね？」と山本さん。表情を見ながら慎重に話す必要があると考えた私は、あらためて話をすると約束し、その晩は電話を切りました。

翌日、山本さんは約束を忘れていましたが、私が前夜の話を伝えた途端、その時の興奮を思い出したかのように、再び次々と質問を投げかけてきました。

「山本さんは一番、何を教えてほしいですか」。私が尋ねると、しばらく考え込んだ後「私はこれから、どうなるのか知りたい」。

## タブー設けず信頼関係を構築

私は「最後は死にます。それも、本人が「死」やその道程における課題を乗り越え、それが私にも一緒。だから山本さんがどう生きたいか、どう死にたいか次第で「これから」は変わると思いますよ」と伝え、どこで最期を迎えたいか、誰にそばにいてほしいかを尋ねました。少し考え込んだ山本さんは「あの家で、娘にみとらわたい」と、ゆっくり答えました。

「山本さんが今より忘れることが増えたり、どんな状態になったとしても、ユアハウスがその最後の願いをかなえられるよう、全力で応援させてほしい」。そう私が伝えると、山本さんは「よろしくお願ひします」と涙を流しました。

山本さんは実際には、アルツハイマー型認知症と診断されています。でも私たちが求めたのは診断ではありません。自分が「大丈夫だ」と納得できるより、自分をみつめることで、「自分が自分でなくなるかもしれない」という将来への不安が、安心に変わることだったのだと思います。

認知症のある人に対して

「山本さんは今より忘れることが増えたり、どんな状態になったとしても、ユアハウスがその最後の願いをかなえられるよう、全力で応援させてほしい」。そう私が伝えると、山本さんは「よろしくお願ひします」と涙を流しました。

山本さんは実際には、アルツハイマー型認知症と診断されています。でも私たちが求めたのは診断ではありません。自分が「大丈夫だ」と納得できるより、自分をみつめることで、「自分が自分でなくなるかもしれない」という将来への不安が、安心に変わることだったのだと思います。

認知症のある人に対して

二〇二五年の認知症の人数は約七百万人と推計される。本人を尊重する介護の実践を、現場のスタッフが報告する。

◆ 次回は九月二十九日掲載



利用者の女性と笑顔で話す金山峰之さん

ユアハウス弥生 東京都文京区にある介護保険の地域密着型サービスの事業所。定員29人。利用者は事業所への通いや泊まり、スタッフの訪問といったサービスを受け、自宅での生活を続けている。